月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.118



《結社》の侵攻により
傷ついた王都、
クローゼの想いとは

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る

英雄伝説 空の軌跡

ザナドゥが《聖獣》まみれに!?

も～っと集まれ！ファルコム学園

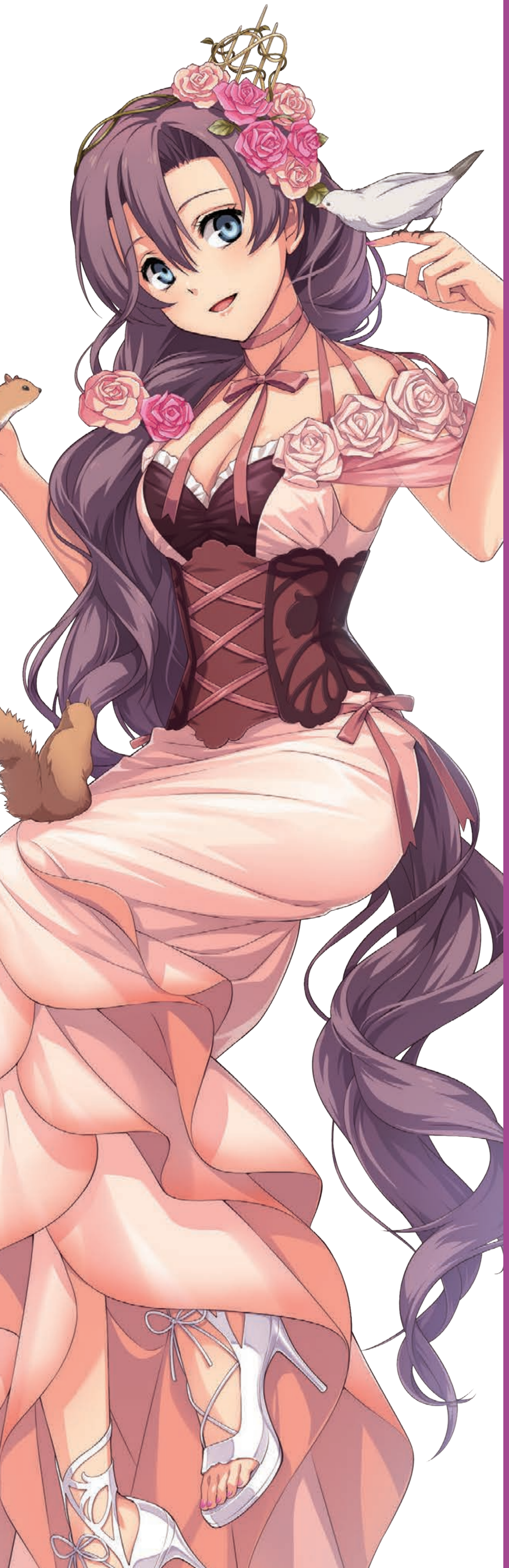
エマの可憐な新衣装に注目！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

12月発売予定の注目音楽アルバムを最速レビュー！

Falcom アクースティックス2



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

高解像度な音源で超リアルな音響を再現！

『Falcom アクースティックス2』最速レビュー！

12月16日に話題の新アルバム「Falcomアクースティックス2」が発売！
「アクースティックス（音響空間）」とはその名の通り、高解像度な音源で超リアルな音響の再現をコンセプトとしたアルバムシリーズで、本作は2014年に発売されたアルバム「軌跡jdkアクースティックス」に続く第2弾となっているのだ。そこで今回は、その魅力について最速レビュー！
聴く前に、そして聴いた後にも読んでみることをオススメするぞ！　Text by hally（VORC）

ただの続編ではない。「空間」と「ダイナミズム」の共存

日本ファルコムのゲーム音楽は、30年以上に及ぶ歴史の中で「業界初」と言われる試みをいくつも成し遂げてきた。そしてその最新の取り組みとなるのが、ハイレゾ音源用企画アルバム「音響空間（アクースティックス）」シリーズである。ゲーム音楽のハイレゾ配信は昨今珍しくなくなってきたものの、企画段階から徹底してハイレゾ志向にこだわり抜いたものとなると、現時点でも数少ない。本シリーズの第1弾である『軌跡 jdk アクースティックス』はその中でも屈指の音響的完成度を誇るものとして、発売から6年を経った現在もなお高く評価されている。

ハイレゾならではの聴き応えは、音の距離感にもっとも色濃く現れる。前作では〈軌跡〉楽曲に、主にボサノヴァ調のアレンジを施すことで、細微な脈動やプレイヤーたちの息遣いを最大限に引き出してみせた。それはそれで文句なしに完成されたものであったことは間違いないが、ゲーム音楽ファンの心理からすれば「より原曲に近いアレンジで聴きたい」と思わせるところもあっただろう。第2弾『Falcomアクースティックス2』は、音響的な完成度はそのままに、そうした欲求に応えたものとなっている。

アレンジの対象は1980年代から現代に至る広範な日本ファルコム作品。ロック色の強い楽曲がかなり多く選ばれているのだが、今回はボサノヴァやジャズといった「いかにも」なアコースティック・アレンジ一辺倒ではなく、原曲のエッセンスを巧みに活かしたアレンジも数多く披露している点が特徴だ。アプローチそのものがかなり変化したといえるが、それはプレイヤーもアレンジャーも前作と大きく陣容が変わったためだろう。今回のアレンジは現Falcom jdk BANDリーダー真我光生と、同バンドのキーボーディストgaki-a2が務める。gaki-a2はこれまでFalcom jdk BANDではキーボード奏者としてのみ知られていたので、今回初めてみせるアレンジャーとしての力量に驚かされる方も多いに違いない。

本作におけるアレンジの方向性は、1曲目の「CLOACA MAXIMA」を聴けば、すぐにもお分かりいただけることだろう。オリジナル原曲は「イース」の伝統に則ったスピーディで骨太なロックだったが、その疾走感をしっかりと受け止め、鮮やかなジャズロックに昇華させている。興味深いのは、多くの曲でリズム隊の存在が意外なほど目立っていることだ。そう、前作との顕著な違いとして、今回は「アクースティックス」と銘打ちながらも、ビート感やダイナミズムをしっかり重視していることが挙げられる。曲調に応じてエレピやエレキギターなどを採り入れているのも、そうした姿勢ゆえだろう。Tr.2「Seize The Day」、Tr.4「Overdosing Heavenly Bliss」などに顕著だが、エレクトリックとアコースティックを共存させることで、柔剛を折り混ぜた、アコースティック一辺倒とは異なる形で音響的な魅力を引き出している。

後半ではメロウな楽曲が主体をなし、エレクトリック色も控えめになる。特にTr.6「嘆きのリフレイン」、Tr.8「翼を持った少年」、Tr.10「NO END NO WORLD」の3曲は、ビート感からがらりと変えたアレンジとなっている。それぞれスパニッシュジャズ&ボサ、ピアノソロ、ピアノバラッドとなるが、いずれも原曲のメロディが見事にはまっている。なかでもTr.10は、元々こんな曲だったのではないかと錯覚させるほどで、ここでもアレンジャーの構成力が光る。

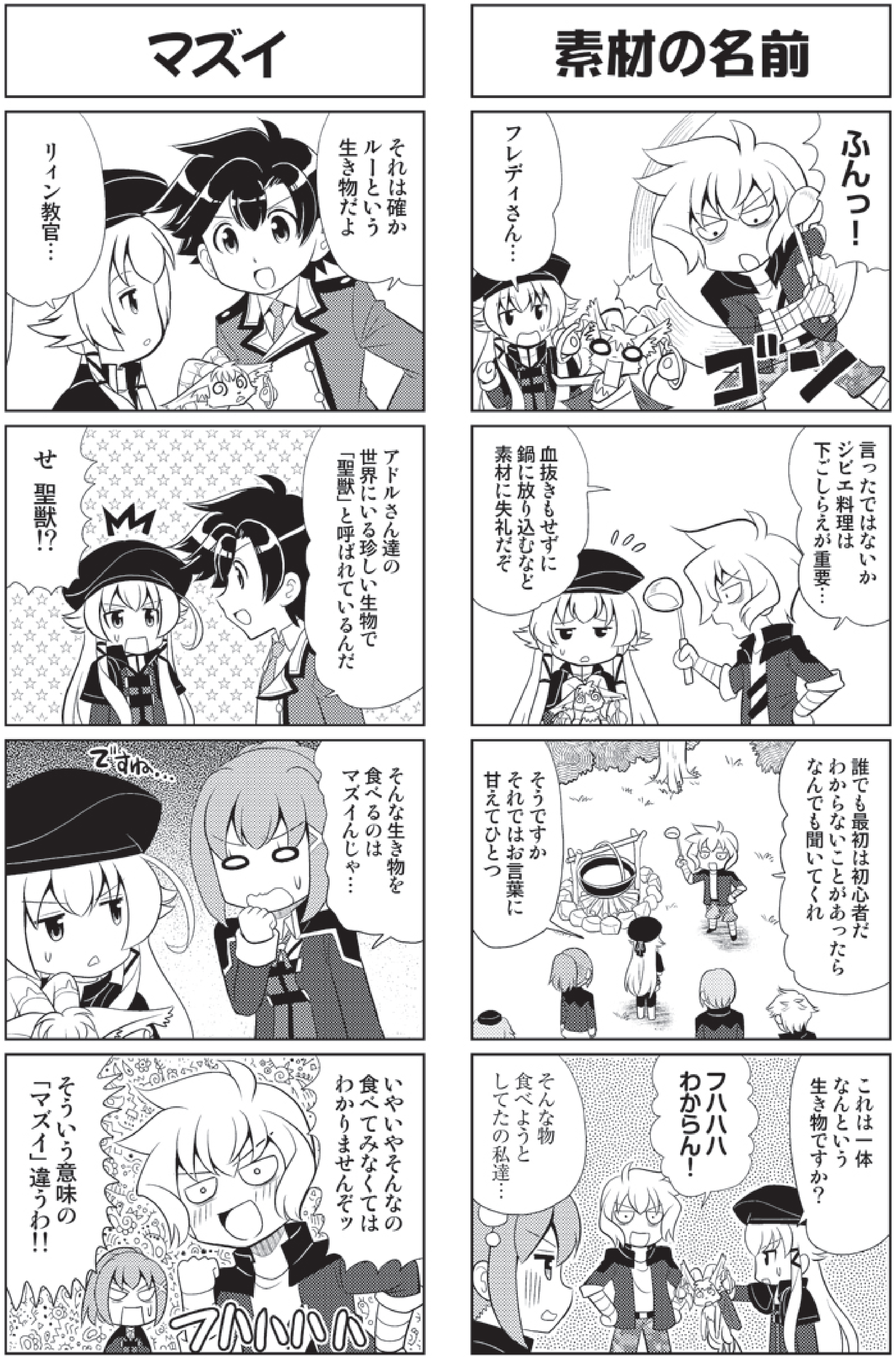
アルバム通しての緩急も素晴らしく、どの曲も甲乙つけがたいが、個人的なオススメを2曲挙げたい。まずTr.4「Overdosing Heavenly Bliss」だ。原曲のほとばしる熱量をあえて受け流しつつ、プログレ的なトリッキーさをジャズカラーで読み解く手際が、実に鮮やかだ。そしてTr.9「悲しき蒼穹を翔ける」。本アルバムの中では例外的に、原曲をストレートに膨らませたアレンジで、フォーキーなギターで魅せる民族プログレな原曲に、ジャズサックスを接合し、アクースティックスとして抜群の説得力を生み出している。



■商品情報
『Falcomアクースティックス2』2020年12月16日発売予定
●価格
【CD盤】2,400円（税抜）
【DL版】[アルバム] 1,661円（税抜）／[単曲] 185円（税抜）
【ハイレゾ音源版】[アルバム] 2,593円（税抜）／[単曲] 324円（税抜）
※CD盤は、音楽CDフォーマットに合わせてCD化した商品となります。

★単行本第2巻、12月10日(木)発売だYO!★





珍しいルー



その正体は



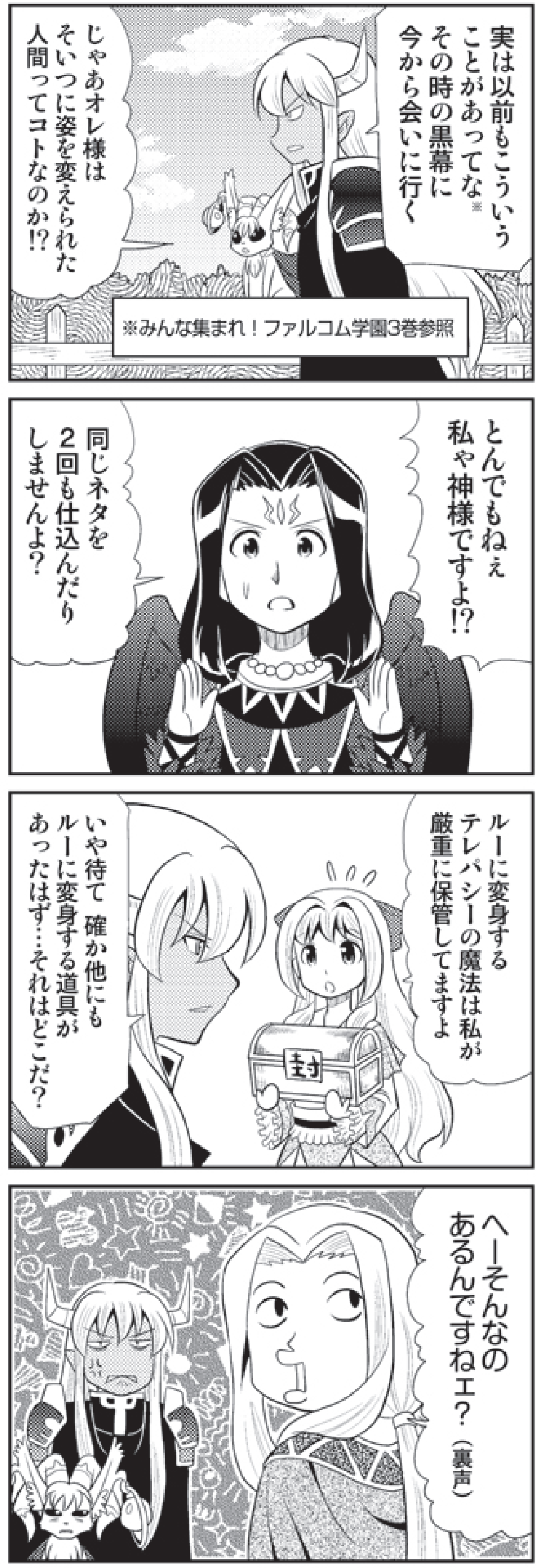
その辺りで見た男



バカ親



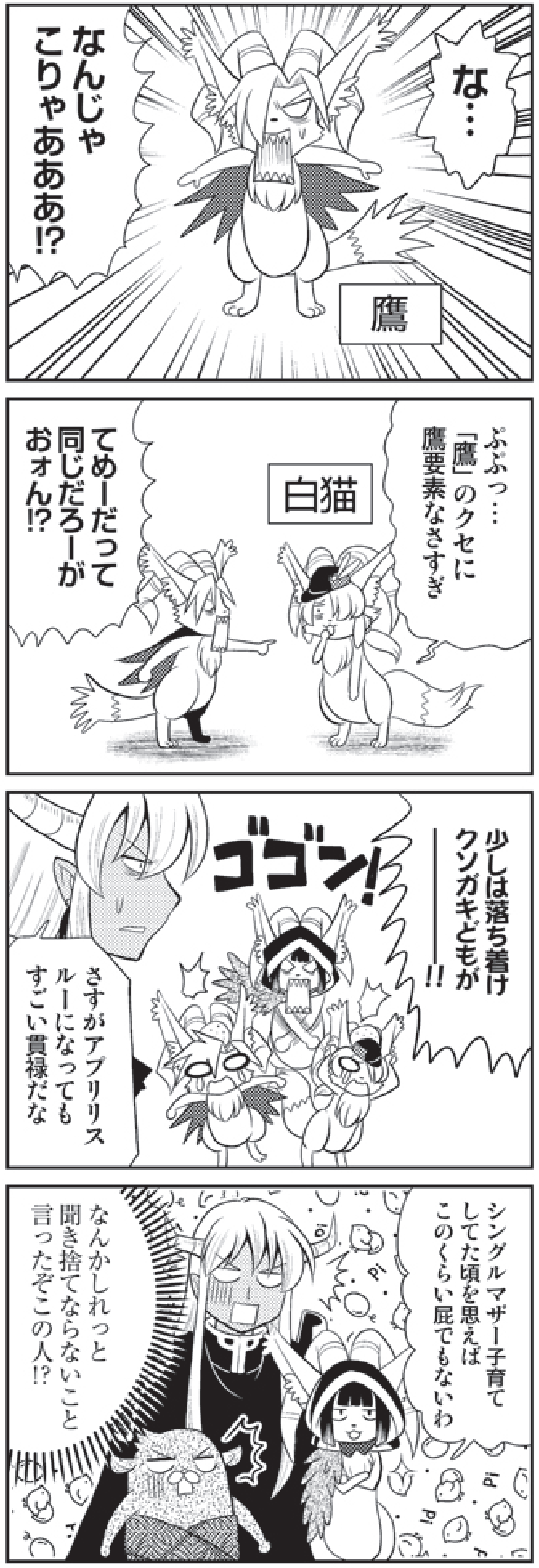
黒幕と白幕



聖魔の首輪



アプリリス式子育て法



人形の不満



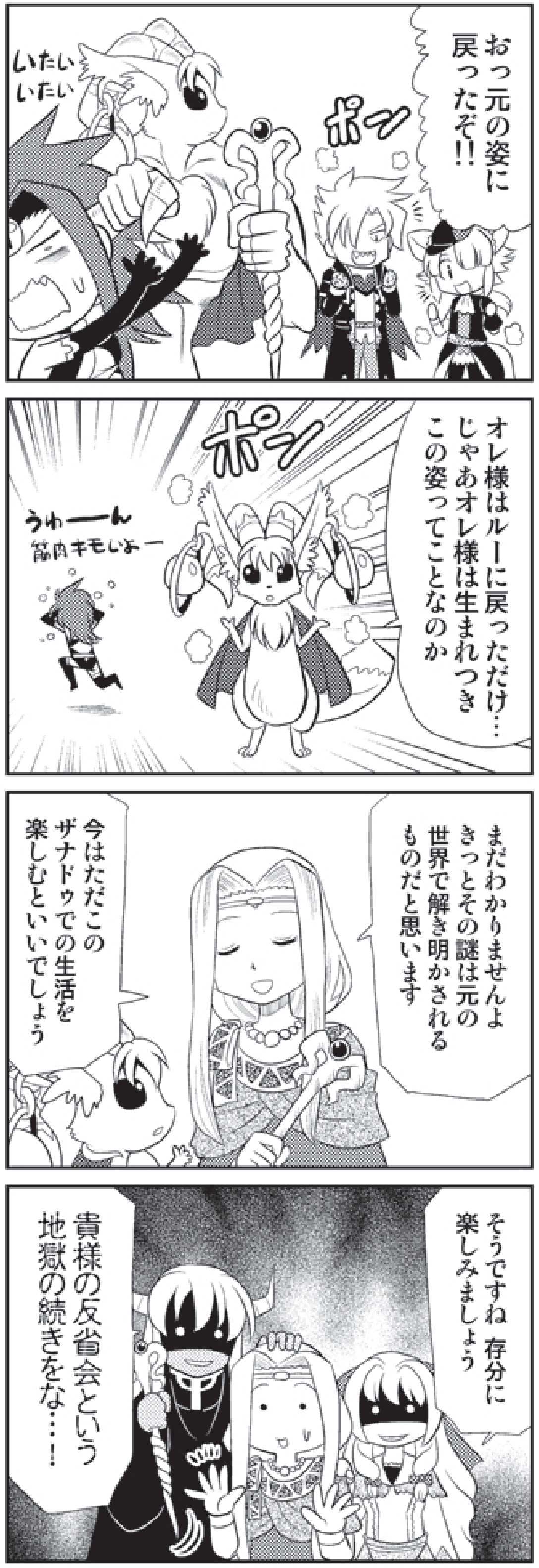
ガルシスの計略



アルターの魔法



今はただ流れるままに



聖獣の味





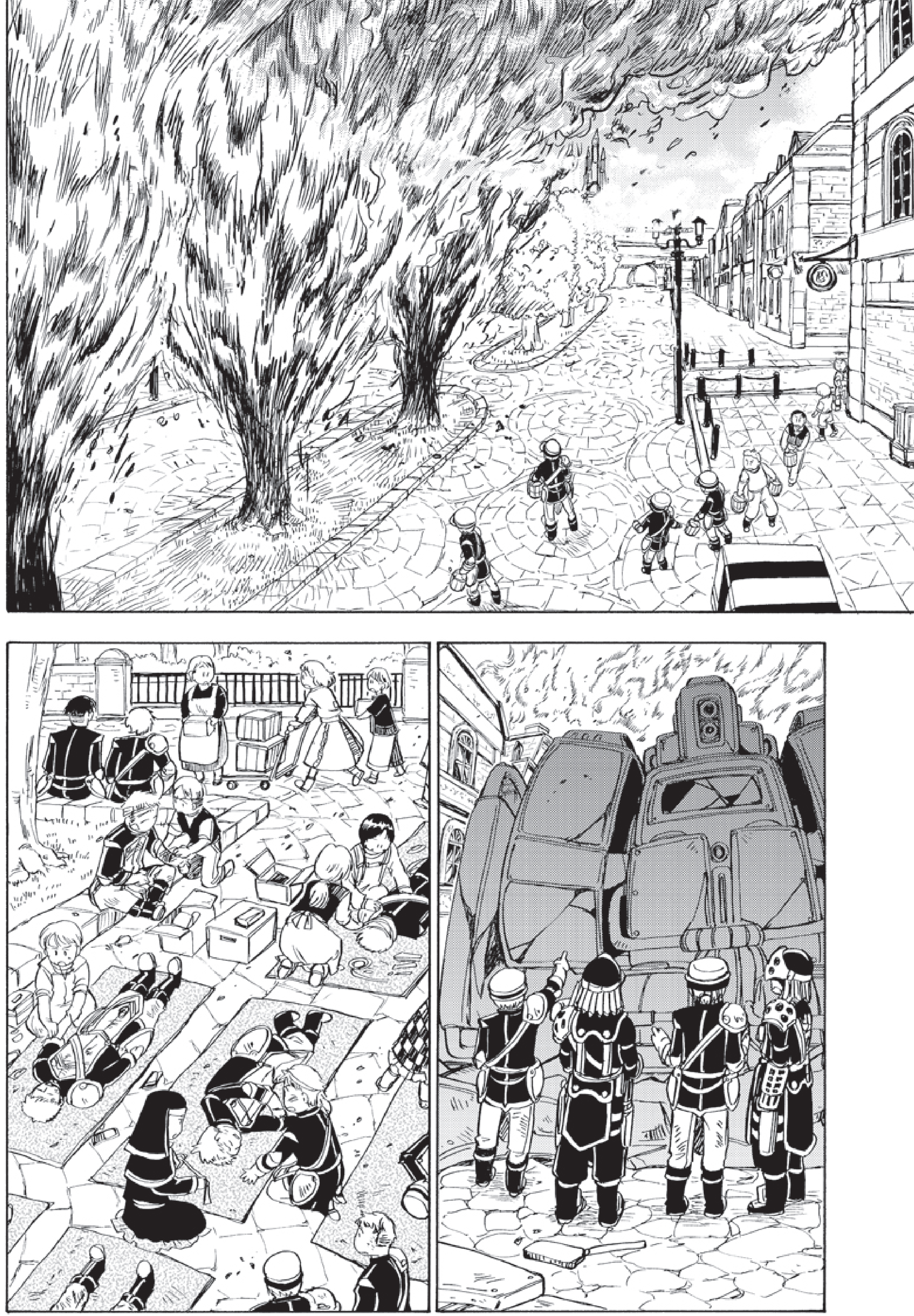
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks



発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks


…退いてくれたようですね
ふむ…深追いできないのが残念だが…
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
いや
ぜいたくは言うまい
みなさん よく来てくれました
おかげで助かりました
ありがとう
わたくしはもう大丈夫です

しかし先程の者によって
市街にも相当の被害が出ているはず
やるべきことはたくさんありますが
今はまずこの混乱を収めましょう
みなさん
力を貸してください




ほんと
こわかったわぁ
なんだったの？
あの人たち？
お城の方へ
向かって行った
らしいんだけど
まぁ…
大変！
女王様は
ご無事
なのかしら!?
ぴゅ！
…クローゼ！


エステルさん
ヨシュアさん
よかった！
クローゼ
無事
だったのね！
王都が結社に
襲われたって
聞いて
でもその時
あたしたち
通信器直しに
ルーアンにいて
急いで
来たんだけど
…もう……
いいえ
その通信器の
おかげで
軍にも連絡が
行き渡り
最悪の事態を
まぬがれることが
できたんです


んー……
でも…
やっぱりもっと
警戒しとく
べきだったわ
クローゼが…
クローディア姫が
結社に狙われてるって
わかってたのに
報告は…
してたけど
あたしたちも
もっと早く
王都に戻れば
よかったのよ
そしたら
こんな…
こんなことに
なる前に
街への侵攻を
食い止められてた
かもしれないのに


済んだこと言っても仕方ないよ エステル
うん
そうよね…
……
あれ?
で…でもそういえば…
クローゼってば
こんなところに出てきちゃって…いいの!?
だって結社に狙われて…
…るのは…クローディア姫で…
…クローゼじゃないんだけど…
で…でも結社にはジェニスの生徒だってばれちゃってるし
お姫様のかっこしてなくても今出歩くのってちょっと危ないんじゃないかしら…?


君がみんなを想う気持ちは
痛いほど伝わるけど
大丈夫だよ 現場のことは僕たちに任せて
こーゆーのは遊撃士協会を頼ってくれていいんだからね!
お願いします
それから…
事が終わったら王宮に来てくれませんか?
遊撃士のみなさんにも
協力していただきたいことがあるんです


消火活動及び怪我人の救助はほぼ完了しました
結社の猟兵たちも王都から撤退した模様です
ひとまず混乱は収拾できたようですね


みなさんの働きに感謝します
本当にお疲れさまでした
な
な
な…
なんでリシャール大佐がこんな場所にいるわけ!?
大佐と呼ぶのはやめてくれたまえ
今の私はただの国事犯にすぎないのだから
だから…
王国にクーデターを起こして捕まった人が
どうして王国のピンチを救ってるのよぉ


すべてはカシウスさんの指示でね
近く王都に危機がおとずれることは察知されていたんだ
だが導力が使えないこの状況下で
導力兵器を主武装とする正規軍だけでは守りきれそうにない
そこで白兵戦の経験が豊富な特務兵と
彼らを指揮する元情報部の上官の起用を決断されたというわけなんだ
エステルさんの言うとおり後々批判を受けるとは思います
ですが国民の安全には代えられません
なによりもわたくしはリシャール殿の愛国心を信じることにしました


そっか
そういう事なら批判なんて関係ないわ！
心強い味方がリベールに帰ってきたってことだもの！
うん！
これでもう何が来たって王都は大丈夫ね！
…いいえ
まだ楽観はできないんです


結社の執行者が立ち去る時
彼らはこう言っていました
「次なる試練が控えている」…と
私はもう
これ以上リベールを傷つけたくはありません！
なんとしても事が起こる前に
災いを食い止めなければ
もっ
申し上げます!!
どうした？
何かあったのか？
さ…先程
ハーケン門と連絡がとれたのですが
リベール北部の国境近くに
エレボニア帝国の軍勢が集結し始めているのだそうです
次回に続く


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に⁉
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……⁉
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y


英雄伝説
空の軌跡SC
4
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第4巻！
やっとあたしは、
ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

34年の時を経て、X68000へのオリジナル「イース」移植が実現！
『イースⅠ&Ⅱ(For X68000)(仮)』が2021年3月9日(火)に発売!!

1987～1988年にPC-8801mkIISR以降用のゲームソフトとして日本ファルコムが発売したアクションRPG「イース」シリーズの原点、『Ys(イース)』および『YsⅡ(イースⅡ)』のオリジナル要素をそのままに、X68000用に忠実に移植。X68000のスペックを活かして画面スクロールがより滑らかとなり、セーブデータ用ディスクが不要になるなど、より快適なゲームプレイを実現しています。





※画像はPC-8801版「Ys」「YsⅡ」のものです。

『イースI&Ⅱ(For X68000)（仮）』商品概要

■ジャンル：アクションRPG　■プレイ人数：1人
■プラットフォーム：X68000／X68030は互換モードで対応　■メディア：5インチ／3.5インチ フロッピーディスク2枚組
■付属品：特製パッケージ、マニュアル　■発売予定日：2021年3月9日（火）　■希望小売価格：8,800円（税別）

BEEP通販ページ　https://www.beep-shop.com/ec/
※「イースⅠ&Ⅱ(For X68000)(仮)」はBEEP通販サイトでの販売、およびアキハバラ@BEEP店頭での予約受付が予定されております。

新久保だいすけ先生描き下ろし！
「も～っと集まれ！ファルコム学園」LINEスタンプ販売開始!!

コミック『も～っと集まれ！ファルコム学園』第2巻の発売を記念して、作者・新久保だいすけ先生描き下ろしのLINEスタンプが登場。12月10日（木）よりLINEでの販売が開始されます。
■商品名：も～っと集まれ！ファルコム学園／ふぁるこむ34　■発売日：2020年12月10日(木)　■価格：120円
ファルコムLINEスタンプ紹介ページ　https://www.falcom.co.jp/line-stamp



『英雄伝説 創の軌跡』最新イラスト満載！
「創の軌跡カレンダー2021 -BOYS side-」
「創の軌跡カレンダー2021 -GIRLS side-」発売!!

PlayStation® 4専用タイトル『英雄伝説 創の軌跡(はじまりのきせき)』に登場するキャラクターの美麗イラストのほか、描き下ろしイラストも多数収録した2021年用壁掛けカレンダー「創の軌跡カレンダー2021 -BOYS side-」と「創の軌跡カレンダー2021 -GIRLS side-」が12月10日(木)に発売されます。2021年はこれで決まり！



最新作「英雄伝説 創の軌跡」に登場するキャラクターたちの美麗ビジュアルを使用した2021年用のB3サイズ壁掛けカレンダー。これまでに公開された各キャラクターのイラストのほか、カレンダー用の描き下ろしイラストも多数収録。表紙+12ヵ月の計13枚分をお楽しみいただけます。

「創の軌跡カレンダー2021」商品概要
■商品名：「創の軌跡カレンダー2021 -BOYS side-」
　　　　　「創の軌跡カレンダー2021 -GIRLS side-」
■サイズ：B3サイズ
■価格：各2,500円(税抜)
■発売日：2020年12月10日(木)
■予約特典：A4サイズメタリックポスター(描き下ろしSECRETイラスト使用)

「ファルコムショップ」商品ページ
https://www.falcom.co.jp/goods

『英雄伝説 創の軌跡』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

※「BOYS side」には男性キャラクターのみ、「GIRLS side」には女性キャラクターのイラストのみ収録しています。
尚、《C》のイラストはネタバレ防止のため、「みっしぃ」の画像で隠しています。実際の商品では《C》の素顔が描かれています。

11月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
11月は新たに、マキアスとエマの衣装替えキャラクターが登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

12月の新規衣装替えキャラクターは？



旅服・マキアス

特科クラスⅦ組のメンバーで、エレボニア帝国帝都知事の息子・マキアスが、「閃の軌跡Ⅱ」で着用していた旅服姿で登場！
　学生服から動きやすい私服に変わっても、やはりマキアスはきっちりしたままだ。



ラプンツェル・エマ

童話をコンセプトとした衣装替えの新作として、エマがラプンツェル姿で登場。「髪長姫」とも称されるようにロングヘアーが大きな特徴となっている。魔女の一族だけに寒色系の衣装を着ることが多いエマなので、ピンクと花の組み合わせが新鮮だ。

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

アガットは部屋に入ってくるなり、エステルたちに説明を求めた。
ジャンから連絡を受けてやってきたものの、詳しい話はまだ聞いていないという。
こういうときは説明に長じた人物が行ったほうが話は進む。ということで、ヨシュアが説明役を引き受けた。寄付金のことも含めて、ひと通りの事情をまとめて聞かせる。
「ふん、なるほどな……妙なことになってきやがったぜ」
「何が妙なの？」
「《レイヴン》の連中が、港の倉庫から行方をくらました」
エステルの問いに、アガットが答えた。
「えっ！」
エステルだけでなく、ヨシュアもクローゼも驚いていた。ということは、やはり放火犯は《レイヴン》で、院長先生を襲ったのも彼らだということだろうか。
エステルがそう言うと、ヨシュアが首を振った。
「それはどうかな。彼らにカルナさんが遅れを取るだろうか？」
「あ、そっか……。確かに、あの連中の腕前じゃね〜〜」
カルナの足下にも及ばない。
「それに、どうやって彼らは学園祭で集めた寄付金のことを知ったんだろう？」

英雄伝説 空の軌跡2 ～黒のオーブメント～

第5回

『創の軌跡』の発売を記念して

『軌跡』シリーズの原点を振り返る！



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報

好評発売中

著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

「あ〜〜〜、そういえばそうね」
それでもまったく関係ないとは思えない。あまりにも行方をくらますタイミングが良すぎた。
「ちっ。こうして議論していても埒が明かねえな。ガキども、とっとと行くぞ」
「だ、誰がガキよ……って怒っている場合じゃないか。どこに行くつもり？」
「手掛かりを掴んで、犯人どもの行方を追うしかねーだろ！」
アガットはもう扉を開けて廊下へと出ていた。
「現場を調べるんだよ！」
「あ！　そうか、まだ調べてなかった……」
「この子たちが襲われたというマノリアの手前ですね」
宿屋の女将に子どもたちと先生を見ていてくれるよう頼んでから——そうしないと、クラムなどは付いてきそうだった——エステルたちは宿屋を出た。
街道を戻り、報告にあった辺りを手掛かり求めて探し回る。けれども、すでに日は西の空低く傾いていて、周りの何もかもが色を失い暮色に染まりつつあった。
「マズイな……」
アガットが舌うちをした。
あたりはどんどん暗くなってきていて、もう少しで人の影も判別できなくなりそうだ。
「これじゃ、何も見えないわよ。それに……いったい何を探したらいいの」

「あほ。それが判れば苦労ねえ」
アガットの言い様にむっときたものの、エステルも口喧嘩で時間を無駄にしたくはない。
ピューイ！
鳴き声とともにシロハヤブサが空から降りてきた。
「まあ、ジーク……どこに行ってたの？」
クローゼがジークに問いかけると、ジークはピュイピュイと何かを告げるように鳴いた。
「まあ！」
クローゼが驚いた顔になる。
それを見ていてアガットが「なんだありゃ」といぶかしげな声をあげた。確かに初めて見ると、何をしているのかと途方に暮れるだろう。
「クローゼのお友だちで、シロハヤブサのジークよ」
とりあえず簡単に正体を告げておく。その間に、クローゼとジークの会話は終わっていた。
「そう……判ったわ。ありがとうね、ジーク」
「判ったって何がだよ」
「先生たちを襲った犯人の行方です」
あまりにさらりとクローゼが言ったので、アガットは何を言われたのか最初は理解できないようだった。

「ああ、そう犯人のね…………なっ、なんだとぉ⁉」
「じゃあ、ジークはテレサ先生を追いかけて居なくなっていたのね」
「そうか。それで姿が見えなかったのか」
「はい。この街道の先だそうです」
「お、おいちょっと待て。なんの話してんだよ！」
　アガットが言った。
「なにって、だから犯人の行方をジークが見たって」
「急いだほうがいいですね。夜になってしまうと、ジークの目でも見えなくなってしまうかも」
「は……はは。お、面白いジョークだぜ……」
「ジークってば、お手柄よ！」
　エステルはクローゼの肩に留まっているジークへと声をかけた。
　ピューイ！
　誇らしげにジークが鳴いた。
「お前ら、そんなヨタ話を信じてるんじゃねえだろうな？　シロハヤブサが犯人を見ただの。それをそこの嬢ちゃんに話しただの」
「僕たちは何度かこの目で確かめていますし」
「信じないんだったら付いて来なけりゃいいのよ。クローゼ、ジーク、行きましょ！」

「はい！」
　ピューイ！
　ひと声鳴いて、ジークは夕暮れに染まる空へと舞いあがった。くるりと頭上でひとつ輪を描いてから、街道をマノリア村のほうへと向かって飛んでゆく。そのまま村を越えた先へと誘っているようだ。
　エステルたちはジークを追って走りだす。
「お、おいこら、ガキども！」
　アガットの声が背中から聞こえてくる。ちらりと振り返ると、アガットもちゃんとエステルたちを追って走りだしていた。目を前に戻すと、ジークがふたたび空の上を戻ってきて、さらに先へとエステルたちを誘った。
　村を越え、大陸の西にあたるマノリア海岸へ。海岸に突き当たった処で三叉路になっていた。
　そこを左へ。海沿いに走った。
「確かに誘導しているみたいだが……」
　アガットがようやくジークの行動を認め始めた。
「ねえ、ヨシュア。この先って……」
「うん。灯台のある岬のほうだね」
　ジークはそちらに向かって迷いなく飛んでゆく。後を追うエステルたちを急かすように、ジ

ークは盛んに空の上で鳴きつづけた。まるで急げ急げと言っているみたいだ。
　岬の外れに建つ灯台が見えてきた。
「バレンヌ灯台か。ルーアン市が管理する施設だな。確か灯台守のオッサンがひとりで暮らしていたはずだが……」
　ジークはバレンヌ灯台の上で何度も輪を描いていた。
「ここみたいだね……」
　ヨシュアが言った。
　岬の果てに立つ灯台の向こうに、赤く大きな太陽が沈んでゆくところだった。

† † †

「間違いありません。先生たちを襲った人たちは、あの建物の中にいると思います」
　灯台の真上で羽ばたいているジークを見て、クローゼが言った。
　ヨシュアがアガットに問いかける。
「あの灯台を管理している方は、あそこにひとりで住んでいるんですね?」
「ああ。年配のオッサンが住み込みで管理しているって話だ」
「ということは……、占拠された可能性が高そうだ。あそこにいるとすればだけど」

「入ってみるしかないってことね」
「はい」
　エステルの言葉にクローゼが頷いた。
「ちょっと待ちな。嬢ちゃん、あんたは……」
　アガットは、ここで待っていろ、そう言うつもりだったに違いない。
　だがクローゼは静かに首を横に振った。
「行かせてください」
「なにぃ?」
「誰がどんな理由で先生たちをあんなひどい目に遭わせたのか知りたいんです」
　それが単なる好奇心だったならば、アガットは即座に却下しただろう。
　だが、アガットは「そ、そうは言ってもな……」と口籠った。見上げるクローゼの瞳に単なる好奇心を越える決意を見てとったのだ。抑えた静かな怒りを示すように彼女の拳は白くなるほど握りしめられ、いらぬ言葉を発さぬよう唇はきゅっと引き結ばれている。
「彼女の腕は保証しますよ。少なくとも足手まといになる心配はないと思います」
　ヨシュアが淡々と告げる。
「ち……勝手にしろ」
　アガットが折れた。

「だがな、相手はカルナをあっさり無力化させたような連中だ。くれぐれも注意しとけよ」
「はい、肝に銘じます」
「じゃ、決まりね」
エステルはそれ以上の議論は無用だとばかりに話を切り上げる。今は正直人手が欲しい。その人材が優秀だと判っているならなおさらだ。そしてエステルは、クローゼが間違いなく優秀な剣士だと確信していた。
灯台に入る直前に、空の彼方からジークが降りてきてクローゼの肩に留まった。
「そいつも一緒かよ」
アガットが少し呆れた口調で言ったが、反対というわけではないようだ。
「私の友人ですから」
ピューイ!
誇らしげにシロハヤブサは胸を張った。
「……ガキと小娘二人と鳥が一羽かよ……。んな遊撃隊(パーティ)、聞いたことがねぇぞ」
「なにごとにも初めてってあるものよ」
努めてて明るく言いながらエステルは扉を開ける。
重い鉄の扉を開けた先は、狭い部屋になっていた。四角形の隅を面取りしたような八角形の部屋で、幅も奥行きも八アージュほどしかない上に、てっぺんの導力灯へと昇る螺旋階段が壁の内側を巻いているのでさらに狭く感じる。
部屋の奥に人影が三つ。
見た瞬間に、エステルはその顔のひとつに見覚えがあると気づいた。
「こ、こいつ!」
ルーアンの街を初めて訪れたときに、大橋を渡った先で絡んできた。
《レイヴン》のひとりだ。
「まさかとは思ったが……」
アガットの口調には無念さがかすかに滲んでいる。
「おい、ディン……こんな処で何やってやがる!」
怒りを込めて張り上げた声は、エステルが思わず目を瞑ってしまうほどの怒気に満ちていた。
だが――。
ディンと呼ばれた青年は、まるでぜんまい仕掛けの人形のようにぎりぎりと首を回してアガットを見た。様子がおかしい。アガットも気付いたようだ。
「お、おい……」
「……」
ディンの目はうつろだった。その瞳はアガットを見ているようで見ていない。
「アガットさん、危ない!」

ヨシュアが叫んだ。
金属でできた棍棒のようなもので、ディンがアガットに殴りかかってきた！
重い鋼の音が響く。
「うぉ⁉」
エステルは、自分の目で見たものが信じられなかった。
「すごい！」
アガットが背負っているのは《重剣》と呼ばれるほどの巨大な剣だ。剣先が地面をこすりそうなほどまであって、なおかつ柄の部分は上背のあるアガットの頭よりも高いところにある。それくらい大きな剣なのだ。二アージュは越えていそう。
それなのに――。
雷光の早さで直前まで背負っていた剣でディンの棍棒を受けて見せた。
「ぐっ」
「アガットさん！」
ヨシュアが叫んだ。
「うそっ、押されてる⁉」
エステルも驚いてしまった。
鍔ぜり合いの状態から、徐々に押し込まれて、あのアガットが膝をつきそうになっている。

「くそっ！」
剣を薙ぎ払って、相手の武器の下から辛うじてアガットが脱出する。
「こ、この力……。ディン、てめぇ」
睨みつけるアガットに、《レイヴン》の青年は無表情のままゆらりと歩を進めてくる。
奥にいた見覚えのない顔の二人もにじり寄ってきた。まるで操り人形のような動きだ……。
「はっ、上等じゃねえか。キツイのをくれて目を覚まさせてやるぜ！」
「アガットさん！」
ヨシュアが叫んだ。
「あたしたちも！」
「お手伝いします！」
ヨシュアの両手にはいつのまにか短剣が握られていた。エステルは背負っていた両手持ちの棍を構える。腰のレイピアをクローゼが抜くと、肩に乗っていたジークは彼女を邪魔しないように天井近くへと飛んで離れた。
表情の消えた顔で、《レイヴン》の男たちが襲い掛かってくる！
「おらぁ！　目ぇ覚ましやがれぇえ！」
アガットが吠えて、《重剣》を振り回した。
瞬く間に男たちの武器を弾き飛ばして追い詰めていく。エステルたちは、《レイヴン》の男

たちがアガットの剣から逃げようとしたところを狙って、効率よく叩きのめしていった。
あっという間に男たちは気絶してしまった。
だが――。
「信じられない……前に戦ったときとはケタ違いに強いし」
「様子も変でした」
クローゼの言葉にエステルも同感だった。
どうにもおかしな振る舞いだった。ひとことも口を開かなかった。
「ふん……どうやら操られているみたいだな」
「操られている？」
間違いないね、と気絶しているディンたちに近づき、屈みこんで調べたヨシュアが言った。
「薬品と暗示を併用した特殊な催眠誘導みたいだ」
肉体的なポテンシャルを限界まで引き出しているのも、その暗示の力だろうとヨシュアが冷静に指摘する。
「そ、そんな事できるの？」
「簡単じゃねえがな。相当な技術が必要になるのは間違いねえ。……とにかく、上を目指すぞ。こいつらを操っている真犯人どもがいるはずだ」
灯台は灯光を発するてっぺんの導力灯まで螺旋階段を昇らなければならない。吹き抜けではなく、内部はどうやら三階層か四階層ほどに分かれているようだ。
そのどこかに灯台守を人質にとって犯人たちがいるのだろう。
エステルたちは階段を上へと昇っていった。

† † †

二階にも三階にも《レイヴン》の連中が待ち構えていて、エステルたちを見つけると無言で襲い掛かってきた。そのたびに戦いになってしまう。
辛うじて撃退できはした。むしろ撃退できてしまったというところが問題だった。
「まずいな。こいつはひょっとすると……」
「足止め、でしょうか」
ヨシュアが言って、アガットが頷いた。
敵が戦力をわざわざ分散させたことに、アガットは疑いを抱いたのだ。
「いくら狭い所だからとはいえ、全員が一気に襲い掛かってきていたら危なかった」
「どんな思惑があるかは判らんが……。こんだけ派手に戦ってるんだ。上のやつらが気付いてないはずがねぇ。……おい、ガキども」
「なによ？」

喧嘩している場合ではないので返事を返したが、不機嫌そうな声を出すくらいは許されるだろう。

「おまえじゃねえよ。そっちの魔法（アーツ）を使う方だ」

　アガットはヨシュアをちらりと見た。そして、灯台の上のほうを見上げながら、「隠密に使えそうな魔法（アーツ）は覚えているか」と尋ねてくる。

「隠密、というと……気配を隠したり、音を消したりという魔法ですか？」

「ああ。クォーツの力でもいいんだが」

「残念ながら」

　ヨシュアも、クローゼも首を振った。

「ちっ」

「不意を討つつもりですか？」

「どこまでできるかわからねぇがな」

　ヨシュアは考えこんだ。それから顔をあげてアガットに告げる。

「《クロックアップ》なら……」

《クロックアップ》は加速の魔法だ。自らの周りだけ時の流れを操って、素早い動作を可能にする。

　アガットがもう一度だけ螺旋階段の上を見上げた。

　今、エステルたちは三階にいる。塔の内側の部屋はどうやらこの上の四階で終わりのようで、そこからは人の気配が感じられない。さらに上は導力灯部屋のある屋上のようだから、うまく四階を通るときだけでも相手に悟られなければ、不意討ちができるかもしれない。

「それしかねえか……」

　決めてしまうとアガットの対応は早かった。ヨシュアに命じて全員に《クロックアップ》の効果を付与させた。

　加速された時の流れの中で、エステルたちは階段を駆けあがり、密やかに四階を通り抜けた。

　そこから階段をさらに半周した先に、屋上へと続く扉が待ち構えている。

「あれ……この声……」

　扉を細く開けたところでエステルの手は止まった。外から風に乗って声が聞こえてくる。

　男たち数人の話し声だ。その声のひとつに、エステルは覚えがあった。

「これで連中に罪をかぶせれば、すべては万事解決というわけだね」

　低い、男の声……。

（この声って）

　エステルは記憶の淵から声の主を思い出そうとした。

「我らの仕事ぶり、満足していただけたかな？」

　別の男の声がした。

「素晴らしい手際だ。念のため確認しておくが、証拠が残る事はないだろうね？」
そう言う男の声は、冷たい、心を凍りつかせるような声音だった。
エステルは一度ならずこの声を聞いている。ただ、そのときは礼儀正しい温かみのある声だった気がする。そう、思い出した！
市長秘書のギルバートの声だ！
別の男の声がギルバートの問いかけに安心しろと請け負った。
「たとえ正気を取り戻しても我々の事は一切覚えていない。そこに寝ている灯台守も朝まで目を醒まさないはずだ」
それを聞いてギルバートが笑った。
「くくく。あの院長もこれで孤児院再建を諦めるはず。放火を含めた一連の事件も、あのクズどもの仕業にできる。まさに一石二鳥というものだな……くくく」
扉の隙間に耳を押し当てて聞いていたエステルの身体が怒りでかっと熱くなった。
（あんですってぇええ⁉）
ぎりっとエステルは奥歯を噛みしめる。
「あいつら……放火も、院長先生を襲ったのも、あの《レイヴン》に全部押しつけて済まそうって気なの？　冗談じゃないわ……」
「落ち着いて、エステル」

小声で制しながら、ヨシュアがエステルの腕をつかむ。エステルが今にも扉を押しあけて、会話をしている連中をぶっ飛ばしに行きそうだったからだろう。
だが、ギルバートと謎の男たちとの会話はまだ続いていたのだ。
驚くべき真実が明らかになろうとしていた。
「あんな孤児院を潰して何の得があるのやら……」
「ふふ、判らないか。市長は、あの土地一帯を高級別荘地にするつもりなのさ」
「ほう……？」
（市長が！）
それで、真の犯人が判った。秘書ギルバートの裏には、さらに市長ダルモアがいたのだ。
「風光明媚な海道沿いで、ルーアン市からも近い。だが、金持ち相手の別荘地に貧相で薄汚れた建物は目障りだろう？　だから、焼いたのさ。さっぱりと綺麗に。あのガンコ女が孤児院を金で手放すとも思えなかったしな」
それで諦めると思ったのに、と続ける。再建可能な寄付金が集まったと学園祭で知ると、今度は秘書に命じて強奪させたというわけだ。
エステルはようやく舞台袖で貴賓席を見たときの違和感の正体に気付いた。
ボース市長メイベルの隣にはメイドのリラがいた。
ナントカ公爵の隣には忠実な執事のフィリップがいた。

だがダルモア市長の隣には、いつも影のように付き従っていたギルバートの姿がなかった！
あのとき既に、学園長から聞かされて寄付金の話を知ったダルモア市長は、ギルバートに命じて院長を襲撃する手はずを整えさせていたのだ。
（あのとき気付いていれば！）
そこまで聞けば充分だった。怒りに震えるエステルの手が扉を押し開けようとした。
一瞬早く、もうひとつの細い腕がエステルの脇から伸びる。勢いよく扉を押し開けると、小さな影が屋上へと飛び出していった。
クローゼだった。

† † †

エステルたちも慌ててクローゼの後を追う。
空は真っ黒で、月は雲に隠れているか、まだ昇っていなかった。
回転する導力灯のまぶしい明りが、遠い海原に向かって細く長く伸びている。光が真上をよぎるたびに、屋上は瞬きを繰り返すかのように明るくなった。
飛び出したクローゼは、男たちの前に仁王立ちになって背中を震わせていた。
「それが、理由ですか……。そんな……詰まらない事のために、先生たちを傷つけて、思い出の場所を灰にして……あの子たちの笑顔を奪って……」
涙を流しながらクローゼは言ったのだ。
「許せません！」
「くっ……孤児院に肩入れしている小娘か……」
「クローゼだけじゃないわよ！」
出遅れたエステルが、ヨシュアやアガットとともにクローゼの脇に並ぶ。
「きさまら……」
「ほう……てっきり静かになったから、始末できたものと思っていたぞ」
ギルバートの後ろにいた男のひとりが言った。全身を黒装束で覆った男だった。
夜の闇の中でまるで影法師のように立っている。
（黒装束……。こいつら……前に見たことが……）
エステルは気になりつつも、ギルバードから視線を外さない。
「残念だったわね。みんなオネンネしているわよ。しっかし、まさか市長が黒幕だったとはねー。しかも、どこかで見たような連中が絡んでいるみたいだし」
エステルはギルバートの後ろにいる黒装束の男たちを思い出した。そいつらは、空賊たちと湖で取引していた男たちそっくりだったのだ。
「娘、我々を知っているのか？　なるほど……油断のならない連中のようだな……」

「お、おい！　そいつらは皆殺しにしろ！　顔を見られたからには生かしておけない！」
　ギルバートが往生際悪く叫んだ。
「先輩……本当に残念です……」
「市長秘書ギルバート。及び、そこの黒坊主ども。遊撃士協会規約に基づき、てめえらを逮捕、拘束する。諦めて投降しやがれ！」
　アガットが言い放った。
　男たちの数は三人。ギルバートを入れれば四人で、エステルたちと同数だった。人数で負けてはいない。さらにエステルたちはアガットを除けば若すぎて強そうには見えないはずだ。
　だが、一対一ならば遊撃士は強い。黒装束の男は、それを知っているようだった。
「隊長の忠告でな。ここでおまえたちと戦っては、こちらの被害も大きくなるばかり……」
　その言葉に反応したのはヨシュアだ。
「隊長……ひょっとして、空賊と交渉していた男ですか？」
「それも知っているとは……。さすが遊撃士協会の犬ども、鼻が利くようだな……」
「ごたくはいいから、さっさと降伏しなさいよね！」
「フ、それはできんな」
　そう言って、黒装束の男たちのひとりが、懐から出した導力銃——導力で金属の弾を撃ちだす剣呑な武器——を取り出して、仲間のはずのギルバートに突きつけた。

「な⁉」
　焦ったのはギルバートだけでなく、エステルたちもだった。
　黒装束に身を包んだ男たちは、顔も黒い布で覆っているために目許しか見えない。だが、その目つきは決して笑っていない。本気だった。本気で撃つつもりでいる。
「ど、どういうつもりよ！」
「我々の雇い主は、残念ながら市長ではないのでな……。ここまでは利害が一致していたから協力していたが……」
「都合が悪くなれば人質にする、と？」
　ヨシュアがまさかと口調に忍ばせて言った。
「信じてないようだな。おまえたちが動かなければ手は出さないが……」
　男は冷ややかな瞳を少しも揺るがせずに引き金を引いた。
　暗闇の中で銃口が一瞬だけ光り、ガァンという乾いた音がして、屋上に血が飛び散った。
「ぎゃあぁぁあ！　足が、僕の足がぁああ！」
　エステルたちは息を呑んだ。
　黒装束の男の撃った導力銃の弾が、ギルバートの足をあっさりと撃ちぬいたのだ。血が吹き出して屋上の床を黒く染めた。だがギルバートは、激痛に顔を歪めつつも倒れることができない。黒装束の男が強引に腕を取って立たせているからだ。

アガットが舌打ちをして唇を噛む。
銃を持った男がちらりと脇のほうを見た。灯台の屋上、導力灯の収められている部屋の扉にもたれかかるようにして年老いた男が寝ていた。灯台守だろう。
「よせ！」
アガットが叫ぶ。
信じないなら、そっちの灯台守を撃ってもいいぞ、と男の視線が言っていた。
「さあ、本気だと判ったら、しばらく離れてもらおうか。そう、その階段の近くまで下がれ」
アガットがエステルたちを見た。下がれ、と目で言っている。
悔しいが、ここは言うとおりにするしかなさそうだった。
（でも、こんな狭い屋上であたしたちと距離を取ったからって……）
エステルは男たちの意図をつかみ損ねていた。
だから実際に目の当たりにしたときに驚愕するしかなかったのだ。
「では、さらばだ」
そう言って、黒装束の男はギルバートをエステルたちに向かって突き飛ばした。
二、三歩ほど歩いただけで、ギルバートは倒れた。痛みに顔をしかめ、撃ちぬかれた脚を手で押さえて、ぐうう、と声をあげる。
「ま、待ちなさいってーの！」

次に黒装束たちの取った行動がエステルは信じられなかった。
屋上から飛び降りたのだ！
「なっ！」
慌てて駆け寄る。
屋上の手すりから下を覗けば、夜の闇の中、暗くて見づらいものの、男たちが細い糸を腰のあたりから繰り出しながら、おそるべきスピードで降りていくのが見えた。
糸を目で辿れば、手すりに鉤が引っかかっている。
脇に駆けつけてきたヨシュアも見下ろしながら呆然とつぶやく。
「鉤付きワイヤー……」
「な、なんて用意周到なやつらなの！」
まさか、こんな場合も計算済みであらかじめ脱出の用意をしていたというのだろうか。
鉤を外すかワイヤーを叩き切れば墜落させられるだろうけれど、それだとさすがに黒装束たちは助からないかもしれない。魔獣じゃないんだから退治して終わりとはいかないわけで……。
（でも今から階段で降りたんじゃ間に合わない……）
そう考えたのはエステルだけではなかった。
「くそっ……秘書野郎とバカどもの面倒は任せたぞ！」
アガットが言った。

エステルは思わずアガットのほうへと振り向いた。そのときにはアガットは既に手すりに手をかけて、身体を塔の外へと躍らせるところだった。

「ちょ、ちょっと！」

「お前らは、今回の事件をジャンに報告して指示を仰げ！」

ワイヤーを掴むと、革の手袋が煙をあげて擦り切れるのも気にせずに、一気に下まで滑り降りていく。

「アガットさん！」

クローゼが叫ぶが、アガットは一度も上を見ない。先を行く黒装束だけを見ていた。

「あんな速度で降りたら、手の皮が切れてしまうかも……」

ヨシュアのぞっとする言葉に、エステルは一瞬だけ絶句して、だが自分もワイヤーに取りつこうとした。

「待った！　アガットさんが言っていただろう。ここの人たちを放ってはおけない」

「あ……。くっ！」

ヨシュアの言葉は熱くなっていたエステルの頭を冷やすのに充分だった。ギルバートは脚を銃で撃たれているし、《レイヴン》の青年たちは操られていただけなのだ。

見下ろせば、すでに黒装束の男たちは地上まで降りて森の中へと逃げ込んでしまったようだった。陰に紛れてもう見えない。

アガットが今地面に降りた。森へと駆け出していく。

「ああ……」

追われる男たちも追う男も見えなくなる。

残されたエステルたちはアガットに言われたとおりにするしかなかった。

灯台守の老人を介抱し、ギルバート秘書にも止血と応急処置を行った。それから、ギルバートと《レイヴン》の青年たちを縛りあげたうえで閉じ込めておいた。連絡を入れておけばあとで警備隊が逮捕してくれるだろう。

怪しげな黒装束は逃したものの幸運もわずかだが味方してくれたらしい　アガットの作戦による奇襲が功を奏して、奪った寄付金を、彼らはそのまま灯台に置いていかざるを得なかったのだ。百万ミラは取り返すことができた。宿屋の女将を通して今度こそテレサ院長に渡しておく。

こうしたもろもろに片がつくころには夜が明けてしまっていた。

重い身体に鞭を打ちエステルたちはルーアンへと向かう。

まだ最後の悪が残っていた。

第十三幕　古代遺物（アーティファクト）

ルーアンへと向かう街道を、エステルたちはできるかぎりの速さで走る。
朝の空気はまだ冷たく、日差しも昇ったばかりで白い砂利の道を照らす力も弱々しい。
それでも走っていると、あっという間に肌には玉の汗が浮いて息があがってくる。
分かれ道が見えてきた。右に曲がればルーアンへ、左に曲がればジェニス王立学園へと至る分岐点だ。そこでエステルたちは一度立ちどまって息を整えた。
この三叉路までくれば、ルーアンの街まであと少し。乱れた心臓の音を少しでも静めようと、エステルは大きく深呼吸を繰り返した。傍らのヨシュアを見ると、すでに涼しい顔になっていて驚いてしまう。どうして同じように育ってきて、こんなに違いが出るのだろう。
それとも、これは男の子と女の子の差なんだろうか。
「ずるい」
「は？」
不思議そうなヨシュアの顔にエステルは「なんでもないっ」とだけ返した。
「あ、あの……エステルさん、ヨシュアさん」
「ん？　クローゼ、どしたの？」
エステルよりもさらに荒い息をついているクローゼが、顔を曇らせたまま口籠っている。

ようやく声を絞りだした。
「ダルモア市長を、逮捕できるんでしょうか？」
「え？」
エステルは首を傾げる。ヨシュアは判っているという顔をした。
「不逮捕特権のことだね」
「ええ」
「そう、そうだね……」
「え!?」
エステルは訳が判らず、クローゼとヨシュアを交互に見る。
二人とも深刻な顔をして考え込んでいる。
「ど、どういうこと？」
「遊撃士協会には独立国家や自治体に対して不干渉、という原則があるんだ。行政の長に僕たち遊撃士は手を出せないのさ」
「そ、そんなバカな！」
「といっても、それが決まりだからね」
今回の件が暴露されれば、市長は失脚するだろうから、その後ならば逮捕されることになるだろうが……。ヨシュアが考え込みながらそう言った。

「で、でも」
「そうなんだ。それでは時間が掛かりすぎる」
逮捕されると判っていて、ダルモアがおとなしくルーアンに留まっているとは思えない。
時間を与えるわけにはいかない。今、身柄を確保しておく必要があった。だがエステルたちにはその権利がない。
「とにかく今は支部に行ってジャンさんに相談してみるしかないと思う」
「う、うん……」
「あの、ごめんなさい、エステルさん、ヨシュアさん……」
クローゼが、用事を思い出したので先に行っていて欲しい、と言いだした。
こんなときに？　と、そのときエステルはちょっとだけ不思議に思う。あれだけテレサ院長を苦しめた犯人を追うことに熱心だったクローゼなのに、と。
けれど結局のところ、それ以上の追及はしなかった。
クローゼにだってクローゼなりの理由があるはずだ。今は時間も惜しい。ジェニス王立学園に向かう三叉路で思い出したということは、学園に何か用事を思い出したのかもしれない。それに思い出してみれば、クローゼの休暇って、休み明けまでだったような気もするし。
「じゃあ、先に行ってるね！」
「すみません」

クローゼが頭を下げた。
エステルたちはクローゼをその場に残してふたたびルーアンへと走り出した。
背中のほうから、クローゼがシロハヤブサのジークを呼ぶ口笛の音が聞こえたけれど、それもいつものことだったので、エステルはさほど気にしなかった。

†　†　†

エステルとヨシュアと別れた後、クローゼは街道の分かれ道に佇んだまま動こうとしなかった。
軽く口笛を吹くと、空の上のほうからジークが降りてくる。
クローゼの肩へと留まった。
二人には、用事がある、と言ったが……。
ポケットから手帳とペンを取り出して、クローゼは簡単な手紙をしたためる。手帳の頁を破ると、細く畳んで肩に乗っているジークの脚に縛りつけた。
「うん、これでいいわ」
ピュイ？
小首を傾げて、ジークがクローゼの瞳を覗き込んでくる。
「ジーク、また、あなたにお願いしたい事があるの……」

しばらく言葉を交わした後、クローゼはふたたび「じゃあ、お願いね」と言った。
肩から、水平にしたクローゼの腕にジークはぴょんと跳び移る。
「さあ！」
大きく腕を振って前に突きだすと、ジークは羽をいっぱいまで広げて、クローゼの腕から青空へと飛び立っていった。

† † †

遊撃士協会の支部――。
カウンターの向こうでジャンが難しい顔のままため息をついた。
「なんてこった。まさか、ダルモア市長が一連の事件の黒幕だったとは」
「それで、ジャンさん……市長は……」
「そうだね。ヨシュア君の言うとおり逮捕は難しいな。行政の長に遊撃士が手を出せるのは現行犯の場合のみ、という決まりだからね」
「やはりそうですか」
ヨシュアが唇を噛みしめた。
「そ、そんな……。このまま見過ごせっての！」

「まあ、慌てなさんな。証拠も証人も充分あるんだ。これからすぐに王国軍に連絡を入れて出動を要請するよ」
「そうか、王国軍ならば逮捕できますね」
ヨシュアが言った。だが、それでも問題はあるのだ。
「でも――」
「その間に逃げられたら、だろ？　そこで、だ」
ジャンが、ぱちりと似合わないウィンクをした。片目どころか両目を瞑っていたので、まばたきしたようにしか見えなかったが。
「君たちに時間稼ぎをお願いしたい」
「時間稼ぎ？」
「話を聞いた限りだと、市長は今、百万ミラを奪ったギルバートからの報告を待っているはずだ。その報告があまりに遅れれば、彼も慌てて逃げる算段を始めるだろう」
ジャンが冷静に状況を分析していく。さすがに支部のまとめをしている人物だ。
「君たちはまっすぐにここに来てくれた。おかげでかなり時間が稼げたと思う。ダルモア市長が自分の悪事が露見したと気付くまでの時間がね」
「でも、そんなには持たない……」
「ヨシュア君の言うとおりだ。あの市長のことだ。少しでも危ないと思えば、何のかんのと理

由をつけてルーアンを脱出するだろう。外遊だとでも言ってね。何事もなければ戻ってくればいいわけだし」
「ギルバートを見捨てて？」
「気にもしないだろうね。子どもたちと院長先生を孤児院ごと焼こうとしていたんだ」
改めて言われて、エステルは怒りがふつふつと湧き起こってくるのを感じた。
「この支部から直接王国軍に出動を要請するとしても数時間はかかるだろう。だから、その間の時間稼ぎがいるんだ。で、だ。君たちにこのまま捜査を続けてもらう」
「なるほど……そういうことですか」
「ちょ、ちょっと。でも、あたしたちは市長には手が出せないんでしょ？」
エステルは慌ててしまう。
どうやらヨシュアとジャンの間では、次の行動の指針を自動的に理解しあえているようなのだけれど、エステルにはさっぱり判らない。頭のいいもの同士の会話は、まるで謎掛けのようだ。霧の中で行き先だけ告げられているみたい。
「逮捕は無理でも捜査絡みの事情聴取は別なんだ。捜査権は否定されていないからね。君たちはあくまで孤児院放火事件の捜査の一環として市長邸で『捜査』をするわけさ」
「犯人が判ってるのに⁉」
「あえてまだ捜査中だと言えば向こうは断ることはできない。市長への事情聴取だと言えばその場を動けなくなるし、逃げようとすれば遊撃士の捜査を故意に邪魔したことになる。捜査の妨害は現行犯だからそのときはそのまま逮捕だ」
にっと、唇の端をもちあげてジャンが笑みを浮かべた。
わるい笑みだった。
「あ……そういう……ずるっ」
「悪党にばかり悪知恵を使わせるのはもったいないだろ。さあ、エステル君、ヨシュア君。これから市長邸に向かって市長に事情聴取を行ってくれ。多少、怒らせてもいいからできるだけ時間を稼いで欲しい」
「どれくらいですか？」
「二時間、かな。今からだと昼くらいまで。導力通信でレイストン要塞の司令部に応援を要請してみるけど、それくらいは掛かると思う」
「また軍の助けを借りるなんてシャクだけど……そんなこと言っている場合じゃないか」
そこで扉の開く音がした。
振り返ると、クローゼが荒い息をついて扉に手をかけて立っていた。
「はあはあ……お、お待たせしました……」
「いいタイミングで来たわね」
エステルは椅子に腰かけるように言ったが、クローゼは首を振って断った。

「それで……どういう事になりました？」
「放火事件の捜査中ってことで市長邸に乗り込むって話をしていたとこ」
「市長邸に？」
クローゼが少し驚いた顔になる。
「だって、逮捕できないんじゃ」
「だから捜査の続きってことで――」
「ああ、なるほど」
全部を言う前にクローゼは理解したようだ。
「市長への事情聴取という名目で足止めしておくんですね。そうか、その間に逮捕権のある王国軍とかを呼べば……」
さすがは王立学園首席だった。理解が早い。
「そ、そういうことよ、うん」
「あ……そうですか……余計なことをしたかしら……」
クローゼがよく判らないことを言った。
「は？」
「い、いえ。何でもないです。それより私も連れていってください。市長を取り調べるなら証人は多いほうが……」
「確かにダルモアが尻尾を見せるとしたら、孤児院関係者がいるときかもしれないな」
エステルたちからの報告を聞いていたジャンは、クローゼの腕も理解してくれたようで、そう言ってくれた。くれぐれも気をつけてと念は押したが。
「ジャンさん、連絡の方はどうかよろしくお願いします」
ヨシュアの言葉にジャンが大きく頷いた。
「ああ、任せておいてくれ！」

† † †

市長邸の大きさにエステルは圧倒されてしまった。
エステルの家の倍どころか三倍以上はありそうだ。庭の広さにいたってはちょっとした公園なみだった。クローゼによると、ダルモア市長は元大貴族の家柄で、この屋敷も代々の当主に受け継がれてきたものだろうと言う。
ノッカーを叩くと、大きな両開きの扉を開いたのは屋敷に務めるメイドだった。
ヨシュアが一歩前に出て、市長に会わせて欲しいと頼んだ。
「申しわけありませんが、只今、ご主人様は接客中でして……」
「接客中？」

「はい。大切なお客様と大事なお話をなさっておりますので、今日一日は誰も取りつがないように
と仰せつかっております」
言いながら、丁寧に頭を下げてくる。
「アポイントメントをお取りになって、明日以降においでいただけますでしょうか」
「ちょ、ちょっと待って」
エステルは慌てた。
明日までなんてとても待てない。今こうしている間にも、接客中などと言いながら、逃げる
用意をしているのかもしれないのだ。
「その来客のことですが」
唐突にヨシュアが言った。
「僕たちも聞いております。……デュナン公爵閣下ですよね？」
「まあ、その通りですわ」
メイドが驚いた顔になった。
それから、ようやくヨシュアの胸元に付いた遊撃士の紋章に気付いたようだ。
「あら、遊撃士の方でしたのね。ひょっとして、みなさまもご主人様から招待されていらっし
ゃるのですか？」
「はい。市長から直々に。入っても構いませんか？」
「そういう事でしたら、どうぞご遠慮なく。このまま行って、正面にある大広間ですわ」
「ありがとうございます」
ヨシュアがお辞儀をすると、メイドは身体を半身にし、手を奥へと振りながら「こちらへ」
とエステルたちを迎え入れてくれた。ヨシュアに礼を言われた瞬間に、メイドの頬がわずかに
赤くなったのをエステルは見逃さなかった。
「むう」
「どうしたのさ」
「なんでもない！」
大広間へと案内しようとするメイドを、ヨシュアは大丈夫だからと下がらせた。名残り惜し
そうにメイドが去っていった。
クローゼが小声でヨシュアに尋ねる。
「よく、公爵閣下が来ていると判りましたね？」
「別荘地を富豪に売りつける計画と言っていたよね？　学園祭の劇のとき、貴賓席に隣同士で
座っているのを見ていたからね。カマをかけてみたってわけさ」
「まあ……」
「で、市長から招待されているってデマカセ言ったわけ？」
「デマカセじゃないよ。ダルモア市長には『《レイヴン》の連中が迷惑を掛けたら、遠慮なく市

長邸に来てくれ』って言われていたじゃないか」
「あ、そっか」
「ふふ……確かに招待されていますね」
「《レイヴン》の連中に迷惑掛けられたのもホントだし。そっか。じゃあ、遠慮なく！」
「そういうこと。さあ、市長に事情聴取だ」
　正面奥へと進んで、大きな扉の前まで歩いた。
　扉の前に立ち、軽く扉をノック――
　――したりはしなかった。
　エステルたちはまずは扉に耳をつけて中の様子を窺う。
　かすかに声が聞こえた。

「ヒック……ふむ、なかなかいい話だ。確かに、このルーアンは別荘を持つには絶好の場所だ」
　ナントカ――ではなくデュナン公爵の声だ。ヨシュアがちゃんと覚えていてくれたおかげで、ようやくエステルも思い出した。
　ダルモア市長もいるようだ。
「高級別荘地の中でもとりわけ素晴らしい場所に閣下の別荘をご用意いたします。必ずや気に入って頂けるかと……」

「なかなか話が判るな、おぬし。いいだろう、金に糸目はつけん」
「公爵閣下ならば価値を判ってくださるだろうと思いました。後で契約書を持ってこさせます。その前に、もう一献……」
「おっとっと……」

　それ以上は聞きたくなかった。
　エステルはいきなり扉を開けて踏み込んだ。
「こんにちは～。遊撃士協会の者で～す」
　あえて明るく声をあげる。
　脇に並ぶクローゼも軽く頭を下げた。
「……失礼します」
　声は小さいが、それは怒りを押し殺しているからだ。
　酔っぱらったデュナン公爵が赤い顔のまま振り返った。「うん？　どこかで見たような」とつぶやいて、いぶかしげな顔をしている。後ろに控えていた執事のフィリップは、エステルたちのことを思い出したようだ。
　ダルモアはあからさまに不機嫌そうな顔になった。
「困るな君たち……。いくら遊撃士でも礼儀くらいは弁えているだろう。大切な話をしている

のだから出直してきてくれないかな」
ヨシュアが一歩前に出ると口を開いた。
「なにぶん緊急の話なので。実は放火事件の犯人がようやく明らかに……」
「その件か」
ダルモアの顔が、仕方ないという表情を浮かべる。公爵に席を外してもらおうとしたが、当のデュナン自身がそれを断った。
「どんな話なのか興味がある」
「し、しかし……」
「いいじゃない。聞かれて困る話でもないでしょ？」
「それはそうだが……」
なおも渋る市長だったが、ヨシュアが話を先へと進めてしまった。
「実は昨夜またもや孤児院のテレサ院長が襲われました」
「あ、ああ。それは聞いている。まったく酷いことをする。まさか、放火事件と同じ犯人だったのかね？」
自分で両方とも指図していたくせにそんなことを言った。
「その可能性が高そうです」
「ほう……。で、犯人が判ったと？」
「はい」
ヨシュアが首を縦に振った。
「そうか……残念だよ。いつか彼らを更生させることができると思っていたのだが……」
「あれ、市長さん。誰のことを言っているの？」
エステルの問いにダルモア市長は眉をひそめる。
「誰って、君……。《レイヴン》の連中に決まっているだろうが。昨夜から行方をくらませているとも聞いているしな……」
「残念ですが……彼らは犯人ではありません。むしろ被害者と言えるでしょうね」
ヨシュアがきっぱりと言った。
「な、なに!?」
想定外の答えが返ってきたからだろう。ダルモアの顔にわずかに動揺が浮かんだ。
エステルはここぞとばかりに声をあげる。
「教えてあげるわ！　犯人は……」
ヨシュアの隣に並び、エステルは市長に向かって指を突きだした。

†　†　†

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



5名様

カバービジュアル・カード

小説『英雄伝説　空の軌跡』シリーズのカバーイラストをカードにした
ノベルティグッズを3枚1組で5名にプレゼント!

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.118プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①「アクースティックス」アレンジ版で
　聴いてみたい楽曲は？
　アンケート②「創の軌跡」で一番好きな楽曲は？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：アルバム「Falcomアクースティックス2」最速レビュー
2：も〜っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC〜絆の在り処〜
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　12月24日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

『英雄伝説 空の軌跡FC』
ノベライズシリーズ
ついに完結!!

英雄伝説 空の軌跡
3 王都繚乱

正遊撃士になるため、リベール国内の各都市を巡っていたエステルとヨシュア。その旅路の中、失踪していたはずの父・カシウスから漆黒のオーブメントが届く。ふたりは父の行方と導力器の正体を探るべく天才導力学者ラッセル博士を擁する工房都市ツァイスへと向かうのだが……。





英雄伝説 空の軌跡
1 消えた飛行客船
価格：1,200 円+ 税



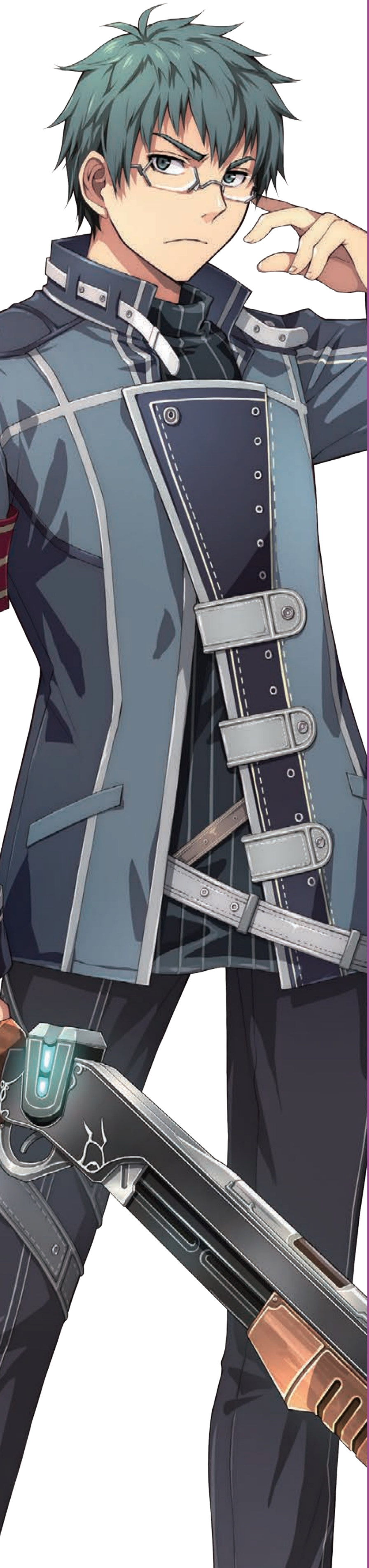
英雄伝説 空の軌跡
2 黒のオーブメント
価格：1,200 円+ 税

既刊シリーズも好評発売中!!

2017年 好評発売中!

原作：日本ファルコム（『英雄伝説 空の軌跡』）
著：はせがわみやび
イラスト：ワダアルコ

価格：1,400 円+税
ISBN:978-4-8021-3067-7



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.118

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/